

陳舜臣さんを語る会通信

NO.117 Jun. 2024

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2024年6月10日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

短編集未収録27作を順次紹介いたします/第1回4作、その1「潜伏者」

中短編は通常、単独で、週刊誌や月刊誌などいろんな雑誌に発表されたあと、中短編集に収録されて単行本化されます。しかし、そうならなかった作品を拾い集め、本通信No. 111で27作、簡単に紹介しました。

これらを、本号から順次、内容に立ち入って紹介して行きたいと思います。まず、初出年の古いものから順に4作取り上げます。これらについては、『宝石』1963年9月号、陳舜臣特集の「自作を語る」でコメントがありますので、それも併せて載せました。(編集委員 橘雄三)

潜伏者 陳舜臣

「潜伏者」は『新週刊』一九六二年3月22日号掲載なので、デビュー直後の作品といえます。挿絵が三つ入って五ページの短編です。推理小説ではない。

自作を語る

戦時中、台湾に蒋介石に似た男がいて、日本統治時代、南京陥落祝賀会に蒋介石に扮して、人気者となった。戦後、台湾が中国領となると、この男は元首侮辱のカドでブタ箱に抛りこまれた。

また別に、戦時中、授業中退屈なので、教科書にのっている天皇陛下の白馬に鉛筆でいたずらをしながら繙馬にかえたカドで、放校になり、要注意人物として、行動を制限された男がいる。

戦後、彼は日本帝国主義に反抗した志士として、もてはやされた。どちらも善人だった。これは二つの実話だが、二人が友人だったというのは私のフィクションである。

舞台

舞台は台北市の西方の観音山。陳舜臣さんの故郷の近くに観音村という村があることはご本人が、別のところでおっしゃっている。しかし、同名の山があるのかは分からない。

「潜伏者」の舞台が台湾であることも

興味深い。同じ年の12月、台湾を舞台にした唯一の本格的長編小説『怒りの菩薩』が書き下ろしで刊行されている。

舞台の菩薩村については、上掲『宝石』一九六三年九月号に「菩薩村は実在の観音村がモデルである」という記述があります。

時代背景、登場人物及あらすじ

「時代背景」

日本の台湾統治が終って間もなくの一九四六年四月のこと。

「登場人物」

●林阿圭 28歳。台北市の西方、観音山の奥深くに家(半ば洞窟)で、「元首侮辱のカド」による重刑を怖れ一人、身をひそめている。犯した罪の内容については、上述「自作を語る」で説明されている。

●王財明 林阿圭の親友。林と同年。林のかくれ家へ週に一度食糧を運んでいる。「民族の英雄」として、新聞屋に追われている。この経緯も上述「自作を語る」に記述がある。

●李東科 どじょうひげ。日本統治時代、日本人にぺこぺこした男。戦後、日本人が去り、大陸からお役人が来ると、彼らにこやか

「あらすじ」

ストーリーは、王財明が観音山の林阿圭のかくれ家に、いつもよりずっと多い食糧を持って訪れ、不思議がる林阿圭に、「おれもここに残るんだ。おめえと一しよにずっと」と言うところから始まる。

林阿圭は「領袖侮辱罪」、王財明は「民族の英雄」という全く逆のこと、一方は罪で他方は栄誉で共に逃げ回る破目に。

李東科は日本人におもねって、南京陥落祝賀会を計画、蒋介石に似ていて、お祭り騒ぎの好きな林阿圭を祝賀仮装行列に引き入れたのだ。そして、戦争が終り、日本人が去り、大陸からお役人が来ると、仮装行列の写真がのっている新聞をもち出し、おそれながら届け出た。また、王財明が新聞屋から逃げ回る原因も李東科にあった。二人は自身の境遇を嘆いた。



短編集未収録作品紹介/第1回4作、その2「午前11時30分」

午前11時30分

陳 舜 臣

「午前11時30分」は、『推理ストーリー』の一九六二年7月号に掲載されました。挿絵が三つ入って十三ページの短編です。

自作を語る

素朴なアリバイくずし。風俗小説ふうに着こうと思ったのだが。

舞台、時代背景、登場人物及びあらすじ

【舞台】

この作品では、二つの殺人事件が起きます。一つは大阪、曾根崎警察署管内での殺人です。これについての記述はほとんどありませんが、殺害を委嘱した人物の神戸でのアリバイ工作の描写は詳細です。

もう一つの殺人事件は神戸、穴門筋近くのアパートR荘で起ります。

【時代背景】

月刊誌の一九六二年7月号に掲載されましたが、作中時間もその頃です。

【登場人物】

●赤松茂 中堅のやくざ。たぬきの忠三とは不倶戴天の敵で、やくざ仲間では公然の事実。

●たぬきの忠三 名の知れたやくざ。

●兎の豊吉 本名、佐藤豊吉。赤松茂にたぬきの忠三殺害を依頼される。

●吉村耕造 穴門筋近くのアパートR荘に住む。病気で自宅療養中。寿命を六ヶ月と踏んでいる。

キャバレー勤めで、客から「骨皮筋江」とあだ名される妻美佐江がいる。

●保子 R荘に住む。バーに勤める。よく部屋に客を連れ込む。

●デブちゃん 本名、水田弘平。近畿産業の社長。でっぷり肥った紳士。保子の客。かつて、美佐江の客でもあった。

●河田三郎 吉村耕造の友人。R荘近くのバラック小屋で一人暮す。

【あらすじ】

まず、大阪、曾根崎警察署管内での殺人事件。赤松茂はたぬきの忠三殺害を十万円で兎の豊吉に依頼する。たぬきの忠三と兎の豊吉に接点はなく、捜査が難航することを読んでの委嘱殺人だった。

アリバイ作りのため、殺人の日を指定し、時刻も午前11時30分と指示した。赤松が思いついたアリバイ作りというのは、真つ赤なスポーツ・シャツで派手な喧嘩をして、見物人が警察へ通報、逮捕されるという筋書きだった。

そして、市電の県庁前停留所付近で喧嘩相手は物色、骨がありそうだが勝てそうな一人の男に絞った。その男、大男だがびっこを引いていた。そして、実行。結果…。逮捕には至らなかったが、停留所にいた七、八人の男女には十分印象づけたと一応の成果に満足。

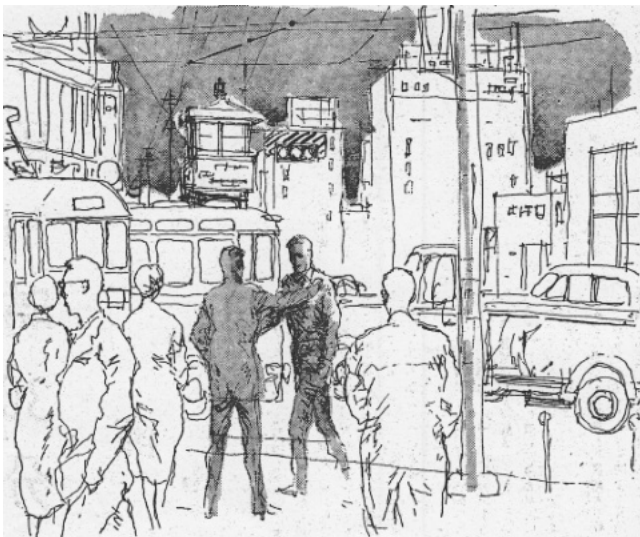
もう一つの殺人事件。神戸、穴門筋近くのアパートR荘の住人吉村耕造が、同じアパートに住む保子の部屋で、一人寝ていたデブちゃんこと水田弘平を殺害します。殺害動機は、保子と話す水田の言葉でした。

「美佐江か…あれは、骨皮筋江や。亭主が病気で入院しとるから、可哀そうや思て、ちよつと可愛

がってやったけど、抱いても骨がギシギシ軋りよつて、…。そやな、あの男が死んだら美佐江も肉がつくかしらんな。そのときに、もういつぺん試してみたらか」

吉村は、水田殺害後、友人の河田三郎を訪ね、午前十一時半前後のアリバイを頼みます。しかし…。河田自身、気がつきませんでした。それは無理なことでした。

二つの殺人事件を繋ぐ人物、それは河田三郎でした。二つの殺人事件は、ほぼ同じ日時に起こっていたのです。赤松茂が、自身のアリバイ工作のため、市電の県庁前停留所で打った芝居を県警本部の女事務員が見ていたことから、吉村耕造が河田三郎に頼んだ嘘の証言が破綻します。



県庁前停留所付近での赤松茂のアリバイ工作

中島憲画

短編集未収録作品紹介/第1回4作、その3「千客万来」

今週の読切小説

千客万来

陳 舜 臣
岡 本 爽 太 画

「千客万来」は、『週刊大衆』の一九六二年八月4日号に掲載されました。挿絵が三つ入って八ページの短編です。

自作を語る

推理小説ではない。自分の周囲にみかける庶民の感情や、ちいさな葛藤をえがこうとした。

舞台、時代背景、登場人物及びあらすじ

【舞台】

舞台は神戸三宮の裏通り。おもに、そこで営業する二軒の中華料理店が描かれます。

【時代背景】

週刊誌の一九六二年八月4日号に掲載されましたが、作中時間もその頃です。作中、登場人物が坂本九の「上を向いて歩こう」を口ずさむ場面があります。

【登場人物】

●鄭万昭 中華料理店、四海軒の主人。引退したと言いつながら、なにかと指図・叱責する父が鬱陶しくてしょうがない。妻芳子との間に去年生れた赤子がいる。

●鄭発茂 万昭の父。老コック。表向き引退したことになるが、実際は口やかましく息子を指図。特別な客が来ると自ら包丁をとる。

●阿雲 コック見習。

●張 紅明軒主人。びっこ。四海軒の鄭万昭と同じ年配。むかし、同じ店につとめていたこと

がある。小僧の時から好敵手で、同じところに独立してそれぞれ店をもった。

●汪添清 当地華僑界の大立者。でつぷりと恰幅の良い初老の紳士。成金趣味の見栄坊。

【あらすじ】

鄭万昭はその日、著名な書家に揮毫を乞い、新しくなった看板を阿雲といっしょに取り付けた。これについて、当てつけがましい義父の一言、「看板新しい、だめ。看板きれいな、だめ。腕わるい、料理下手、仕方ない」に妻の芳子が先ず切れた。

夫、万昭に「あんたは意気地なしだよ！」と彼女は言い放った。「一ぺんぐらい、おじいさんになんとか口答えができないの？だいがどうの、塩が多すぎるの、醤油くさいだの、そんなことを言われて、あんたいつも言われっ放しじゃないの。…」

鄭万昭はついに発憤した。

引退したと言いつながら、監督然として息子の手並みを観察し、なにかと指図・叱責する父を「上をむいて…」と口ずさみ続け、無視した。

權威を剥奪された鄭発茂老コックは、それ以後、調理場へ顔を出さなくなり、憔悴の日々を過ごすようになった。そして、「彼は一日じゅうそとに出ていようになつた」。

ところが、三ヶ月ほどして、父発茂の様子を、妻の芳子は、「最近はめっきり元氣におなりだわ」という。何があつたのか。

夏が過ぎ、秋も過ぎ、そして、十二月、鄭万昭は重大な事態に直面した。ライバル紅明軒が、隣りの自転車修理店を手に入れて店を拡張、華々しく新装開店するというのだ。そんな資金は誰が出したのだろうか…。

新装開店前日、鄭万昭は気が気でならず、朝から何度も紅明軒の様子をうかがいに行つた。そこで見覚えのある車を目にする。



「——おかしいな。どうもこいつは汪添清の車らしいが。家に帰つた鄭万昭は、浮かぬ顔つきで、考え込んだ。…まさか、びっこの金主が汪添清じゃあるまいが」。

その日、三度目の偵察で鄭万昭は目を疑つた。汪添清、びっこの張に続いて、「三人目の人物が紅明軒からあらわれた。その人物の顔をひと目見るなり、鄭万昭はアッと一声低く叫ぶと、思わずつき出していた首をひっこめた。

——おやじだ!」。

短編集未収録作品紹介/第1回4作、その4「火の周辺」



「火の周辺」は、『宝石』の一九六三年2月号に掲載されました。大きめの挿絵が三つ入って十八ページの短編です。

自作を語る

神戸で放火魔が出没したところである。東京のホテルで人間の顔を落書きしているうちに、着想がうかんで、書きはじめた。その晩は、たしか大坪氏と六本木でおそくまでのんだのである。彼がどこへしけこんだか知らないが、私はかくも勤勉だった。

舞台、時代背景、登場人物及びあらすじ

【舞台】

火難が度々起こる久保田邸の所在地の詳細は不明。しかし、登場人物、久保田儀作が経営する会社は「関西運輸株式会社」で、久保田は、「税関貨物取扱人の会議」に出席したり、久保田の放火と噂される事件の被害者の女性の実家が淡路だったり、久保田家の女中の実家が但馬だったりするので、舞台は、まず、神戸で間違いない。

【時代背景】

「火の周辺」は月刊誌の一九六三年2月号に掲載されましたが、作中時間もその頃でしょう。

【登場人物】

●久保田儀作 関西運輸株式会社社長。妻早苗との間に一男一女。

住み込みの使用人

森西／自家用運転手。妻常子

美津子／若い女中。はま／年とった女中。

●田中 23年前、関西運輸(株)の倉庫の火災で焼死した未亡人。当時、5歳の男の子と2歳の女の子を淡路の実家に預けていた。

●三原 関西運輸の社員。社長の信任が厚い。度重なる火難に際し、社長から、社長宅住人の身元調査を依頼される。

●吉川 関西運輸の社員。社長宅夜警組の一員。

【あらすじ】

「三十年まえ、久保田は現在の妻の早苗に恋人がいて肉体関係もあったことを承知の上で、結婚したのである」。当時、早苗は、体調の変化から、妊娠していると思い込み、破談にしようとして久保田に打ち明けたが、久保田は、それを承知で受け入れた。ところで、妊娠は思い込みだった。診察した婦人科医の言ったことば、「あんたは自己暗示にかかりやすい性質なんですよ」が、ストーリーに大きく絡む。

それまで、久保田儀作並びに久保田家の火難は三度起こっていた。

一回目、夜中、久保田の寝室で小火(ぼや)。

二回目、自家用車の灰おとし盒から出火。

三回目、久保田邸の物置場で出火。

また、久保田儀作は、二回目と三回目の間に、一通の脅迫状を受け取っていた。「新聞記事の

平仮名を一字一字切抜いて、安物の便箋紙に貼りつけ」たもので、その内容は、23年前の関西運輸(株)倉庫の火災を、保険金目当ての久保田の放火として、糾弾・脅迫していた。

このような事態に、久保田儀作は社員から成る夜警組を作り警戒する。

クリスマス・イヴ、事態は動く。その日、久保田邸に居たのは、久保田夫婦と年とった女中のはまと夜警組の吉川の四人だった。

「これまでの三回の怪火は、いずれも早苗のしわざであった。結婚生活三十年、毎にち屈辱にまみれてすごした。夫はまるで、お情けでこの家に置いてやると言わんばかりであった。彼女はそれを、自分の過去の落度ゆえと思つて、たえしのんだ。が、もう償いはすんだはずである。夫が最後にほかの女を家に連れこんだとき、償いはすでに終わったのだ。そのあと、百回以上もおなじことがあった。それはみな貸しではなからうか？早苗は五十になった。……」。三回の火難に遭つても反省のない夫を見て、早苗は、「はつきりと、自分は完全な自由を求めるべきであると悟った。ちびりちびりと払い戻しを受けて、はたしていつになったら満額になるのだろう？それよりも、一挙に取り戻したほうがよくないか？もう五十才、ではなく、まだ五十才、である。……もし夫がいなくなれば、……」

クリスマス・イヴ、久保田邸は猛火に包まれた。「消防車が来たときは、もう母屋は手がつけられなかった。……焼けあとからは、二つの死体が発見された」。二つの死体とは、久保田夫婦のようですが……。婦人科医のことば、「あんたは自己暗示にかかりやすい性質なんですよ」がストーリーにどう絡んでいたか、紙幅に余裕がありませんのでここまでとします。